

平成 25 年度 公益社団法人  
日本動物学会第 2 回理事会議事録

1. 日時 平成 26 年 6 月 7 日 (土) 13:00~17:30

場所 北海道大学東京オフィス (東京都千代田区丸の内 1 丁目 7-12)

2. 理事総数と定足数 総数 18 名 定足数 9 名

3. 出席理事数 18 名

4. 出席理事名 阿形清和、岡 良隆、武田洋幸、出口竜作、田村宏治、赤坂甲治、稲葉一男、窪川かおる、蟻川謙太郎、沼田英治、井口泰泉、高宗和史、内山 実、富岡憲治、飯田 弘、高畑雅一、山下正兼、尾崎浩一

監事 2 名(佐藤矩行、長濱嘉孝), オブザーバー 倉谷編集長

事務局: 永井 学会賞等選考説明者 竹井祥郎選考委員長 (選考過程の説明時のみ出席)

5. 配布資料

資料 1 哺乳類シンポジウム企画案

資料 2 新入会数の増減について、理事の選挙結果について

資料 3 N I I からの著作権料の返還、科研費採択状況について、予算執行状況

資料 4 編集出版状況報告

資料 5 UniBio Press からの購読料返還等に関する報告

資料 6 平成 26 年度事業計画について

資料 7 平成 26 年度予算書について

資料 8-1 東北支部特別予算措置の御願いについて

資料 8-2 選挙管理システム費用支払の猶予に関する御願い (北海道支部)

資料 9 日本学術振興会育志賞について

資料 10-1 感謝状贈呈 (井本善次氏) 推薦書

資料 10-2 感謝状贈呈 (佐藤壽彦氏) 推薦書

資料 11 国際交流委員会審議事項について

資料 12 図書委員会審議事項について

資料 13 光生物学会奨励賞について

資料 14 国際会議について

6. 議事の経過および結果

武田庶務より、理事全員が出席であり、定足数が満たされていると報告があり、併せて、監事 2 名の出席が説明された。続いて議事録署名人は、定款 35 条に則り、議長である阿形会長、監事両名となることが確認され、定款 33 条に基づき議長となる阿形会長の開会を告げ、議事に入った。

## I 報告事項

### 1. 会長報告

以下の6つの報告がなされた

#### ○新刊OA刊行支援科研費採択

日本学術振興会国際情報発信強化OA刊行支援に1年の採択を受けた。BioMed Centralと契約を交わし、来年度も再度科研費申請を行い、OA誌のスタートダッシュを図りたいので、理事の皆様にも良い論文の投稿をお願いしたい。

#### ○国際情報発信強化(B)によるZooDiversityWebの構築について

2013年から5年間補助の採択を受けた国際情報発信強化(B)は、この1年で、Zoological Scienceは30巻でおよそ3900論文を出版しているが、その論文が扱う動物種の分類を終え、興味ある結果が出ている。簡単に説明すれば、その結果を使い、Zoological Scienceのみならず、動物学雑誌、彙報を動物名で検索をかければ、その動物に関わる論文が、表示されるDBシステム構築を行っている。サイト名はZooDiversity Webである。

仙台大会では、動物種の分類解析を行った北海道大学嶋田氏に報告講演をお願いすると共に、ブースを出し、大会参加者にDBを使って頂く予定である。

#### ○2016年国際動物学会議の開催と日本学術会議からの支援

2016年11月13日より、沖縄科学技術大学院大学で国際動物学会議を開催するが、日本学術会議へ申請した国際会議補助が採択を受けた。

#### ○仙台大会哺乳類学シンポジウム開催について

資料1を参照。仙台大会時に、将来計画委員会企画の「哺乳類学シンポジウム」開催の運びとなった。

#### ○動物学会事務局自宅勤務者職員採用について

働きたい意志があるが、子供が小さいなどで、定期的に、また決まった時間の勤務は困難であるような方を積極的に雇用しようと本会は、公募を行った。いずれは、事務局の仕事を引き継いでくださる方という目的もあり、二名の方を選び、すでに業務を開始している。ダイレクトメール送信などの他、自宅でできる業務をお願いしてきたが、次期年度よりは、寄付関係やZS送付業務など、1か月に二度ずつ、勤務をお願いする予定である。

#### ○仙台大会前日の各種委員会開催について

理事会と各種委員会の相互交流を深め、また若手会員の積極的な学会参加をお願いするためにも、仙台大会より、大会前日に各種委員会開催を行いたい。その後、懇親会にも参加をお願いし、交流の場を深めたい。また、各委員会委員長には、今期の委員の方々にあと1年の継続をお願いし、委員長(理事)と委員の連続性を担保しておきたいので、委員の方々に、お願いをしていただきたい。

### 2. 庶務報告(武田庶務幹事)

資料 2 に基づき、大阪大会、岡山大会、仙台大会における新入会員数と演題数の推移が示され、大きく減少することなく、ここ 3 年は、現状維持の状況が報告された。

さらに、4 月から開始された理事選挙、次期会長意向投票についての結果報告がなされた。内容は、すでに選挙開票時にダイレクトメール送信されたものであることが報告された。

### 3. 会計報告（出口会計幹事）

資料 3 に基づき報告された。

国立情報学研究所が行っている E L S は 2015 年度をもって終了する。そのため、著作権料として入っている収入は、次年度で最後となる。本年度は、5 月 9 日に 49 万 4 千円の著作権料が振り込まれた。また予算執行状況は、例年通りであるが、今期は、出版経費を受けずにジャーナル出版を行っており、決算状況が待たれるところである。科研費は、新刊 OA ジャーナル刊行支援 890 万円、仙台大会における動物学ひろば、ミニシンポジウムへの補助 90 万円、二年目となる国際情報発信強化（B）420 万円の採択を受けた。

### 2. 第 2 号議案 公益社団法人日本動物学会平成 26 年度予算について（出口会計幹事）

資料 7 に基づき、平成 26 年度予算案の説明があり、併せて、東北支部からの市民参加企画「親子で楽しむ動物学」開催特別予算申請と北海道支部の選挙システム費用の 7 月支払の許可申請が資料 8 で示され、承認された。

### 5. UniBio Press からの購読料返還について（永井事務局長）

資料 5 に基づき、BioOne からの購読料返還分の説明がなされた。Zoological Science は BioOne.2 の中で、リディングジャーナルとも呼べる位置に立っており、全体のコンテンツ量約 5% 対し、ダウンロード率は 9.5% あることに注目をして頂きたい。本年は約 580 万円の購読料返還を受けることになる。昨年の返還金を下回ったのは、BioOne と調査を行った結果、中国からのダウンロードが極端に増加した結果で、今年が通常の伸びを示したものと考えるべきだと判断している、と説明された。

### 6. 平成 26 年度仙台大会について（田村理事）

2014 年 9 月 11 日ー13 日東北大学川内北キャンパスで開催。最終日 13 日には、動物学ひろば、高校生ポスター発表、とミニシンポジウムを予定している。ミニシンポでは、阿形会長、西田宏記会員と田村が講演を行う。また、今年度は、物品販売等ができないため、書籍販売やガチャマシンの設置も含め、すべての販売が中止になる旨、説明があった。

### 7. 平成 27 年度新潟大会について（赤坂理事）

2015 年 9 月 16 – 19 日のうち 3 日間。開催場所はトキメッセ。コンベンションセンターの利用は、金額もかかるが、新潟県などの支援を受けることで、支払は可能であると試算されている。

## II. 審議事項

1. 第1号議案 平成26年度「公益社団法人日本動物学会事業計画」について（武田庶務）  
資料6が示され、事業計画についての説明がなされ、計画案通り承認された。
2. 第2号議案 公益社団法人日本動物学会平成25年度予算について（出口理事）  
資料7に基づき、平成26年度予算案の説明があり、併せて、東北支部からのシンポジウム開催特別予算申請と北海道支部の選挙システム費用の7月支払の許可申請が資料8で示され、承認された。
3. 第3号議案 平成26年度 Zoological Award について（倉谷主幹）  
理事会に先立って行われた Zoological Science 編集委員会から以下の6件の論文賞の推薦があった。理事会として承認した。

Static and Dynamic Hypergravity Responses of Osteoblasts and Osteoclasts in Medaka Scales

Sachiko Yano, Kei-ichiro Kitamura, Yusuke Satoh, Masaki Nakano, Atsuhiko Hattori, Toshio Sekiguchi, Mika Ikegame, Hiroshi Nakashima, Katsunori Omori, Kazuichi Hayakawa, Atsuhiko Chiba, Yuichi Sasayama, Sadakazu Ejiri, Yuko Mikuni-Takagaki, Hiroyuki Mishima, Hisayuki Funahashi, Tatsuya Sakamoto and Nobuo Suzuki  
pg(s) 217–223

メダカのウロコには骨と同様に骨芽細胞と破骨細胞が共存することを証明の上、その培養系を開発し、骨が重力に応答して骨形成を行うメカニズムを解析した論文である。静的な過重力と動的な過重力に対する応答性が異なっていることをはじめて証明した点や宇宙生物学への発展など論文賞に値する。

The Fishermen Were Right: Experimental Evidence for Tributary Refuge Hypothesis During Floods Full Access

Itsuro Koizumi, Yukiyo Kanazawa and Yuuki Tanaka  
pg(s) 375–379

定期的にダム放流のある川をフィールドに、洪水時には河川支流に魚が避難するという通説を実証した研究。

Genetic Diversity and Structure in the Sado Captive Population of the Japanese Crested Ibis Full Access

Kensuke Urano, Kanako Tsubono, Yukio Taniguchi, Hirokazu Matsuda, Takahisa Yamada, Toshie Sugiyama, Kosuke Homma, Yoshinori Kaneko, Satoshi Yamagishi and Hiroaki Iwaisaki  
pg(s) 432–438

佐渡に導入されたトキの遺伝構造および多様性を調べたもので、保全生態学的に重要であり、一般社会の関心もひくと思われる。

Olfactory Homing of Chum Salmon to Stable Compositions of Amino Acids in Natal Stream Water

Yuzo Yamamoto, Hideaki Shibata and Hiroshi Ueda

pg(s) 607–612

筆者らが 2009 年に発表したサケ 母川回帰の鍵となる臭い物質が水溶性アミノ酸濃度であるという知見に基づき、シロサケが遡上する天塩川水系をフィールドとして河川水のアミノ酸組成の季節変動を解析した。検出された 19 種類のアミノ酸のうち 5-7 種類は稚魚が下降する春季と成魚が遡上する秋季ではほぼ同じ濃度となることを見いだした。天塩川を遡上した雄シロサケを用いた二分岐水路での行動実験の結果、遡上する天塩川水系の春季及び秋期のアミノ酸濃度に類似させた人工水により多くの個体が誘引された。また嗅電図による解析では 春季と秋季の人工水を区別していることも明らかとなった。この論文は春季と秋期であまり変動しない水溶性アミノ酸の組成を記憶することで、サケの母川回帰が起こることを行動と生理の二つの側面から明らかにした重要な研究である。

Self and Nonself Recognition in a Marine Sponge, *Halichondria japonica* (Demospongiae)

Yasunori Saito

pg(s) 651–657

ダイダイイソカイメンから切り出した組織片の接触実験により、同一種異個体における 2 種の接触拒否過程の解析、認識反応における中膠細胞の挙動解析、さらに、クロイソカイメンの組織片に対する異種拒否反応との比較解析を行った論文である。多細胞動物で最も下等なカイメン動物における自己・非自己認識能の存在とその認識様式についての情報提示は、この機能の進化を考える上で重要であり、論文賞に値する。

Development of the Chondrocranium in Hagfishes, with Special Reference to the Early Evolution of Vertebrates

Yasuhiro Oisi, Kinya G. Ota, Satoko Fujimoto, and Shigeru Kuratani

pg(s) 944–961

これまで形態発生過程のほとんど分かっていなかったヌタウナギの軟骨頭蓋の発生過程を記載、分子系統的に近縁のヤツメウナギの成体、幼生における頭蓋形態と比較、各骨格要素の相同性の決定を通じ、円口類の頭部形態の一般系を問うと同時に、顎口類の頭蓋形態と決定的な相違のあることを報告した。

4. 第 4 号議案 平成 26 年度日本動物学会女性研究者奨励 OM 賞について (窪川理事)  
5 月 14 日(水)16:00 から、東大二号館において、選考委員会を開催した旨、説明があり、

以下のような二名の候補者が示された、理事会は、審議検討の上、推薦通り、承認をした。その上で、濱田氏のタイトルを動物学会が授与する賞にふさわしいものにするよう検討をお願いしたい旨の意見が、理事より出たため、窪川理事、蟻川賞等理事より、通知して、変更の検討をお願いすることとなった。(記載されたタイトルは変更後のもの)

岡本朋子 (おかもと ともこ)・独立行政法人 森林総合研究所・日本学術振興会特別研究員 PD 研究テーマ「花の化学的プロフィールの変化が昆虫の行動に与える影響の解明」

濱田・川口典子 (はまだ-かわぐち のりこ)・東北大学大学院 生命科学研究科 脳機能遺伝分野・研究支援者 研究テーマ「ショウジョウバエ生殖幹細胞の増殖・分化を制御する新規シグナルの解明」

#### 5. 第5号議案 平成26年度成茂動物科学振興賞について (阿形会長)

成茂動物科学振興賞選考委員会委員長 (会長) より、選考経緯と受賞者決定の報告があり、理事会では、審議検討を行い、承認を行った。

細 将貴 (ほそ まさき) 京都大学白眉センター 特定助教 33歳

推薦理由

細氏は *Satsuma* カタツムリの 右巻き型と左巻き型の地理的分布と捕食者としてのヘビ (*Pareas*) との地理学的分布の相関性、このヘビの歯の形態的特徴、*Satsuma* の地理的分布と分子系統学的関係などを調べ、本来種として不利になるはずの左巻き型の出現が捕食者ヘビから逃れるという利点をもつことで生存してきた可能性を示した。左右対称性を軸にした捕食者と被食者の共進化についての新たな知見である。独自性という観点からも、また若手の独立した研究者としての将来性という観点からも、優れた研究と言える。

#### 6. 第6号議案 平成26年度教育賞について (阿形会長)

動物学会教育賞選考委員会委員長 (会長) より、候補者の推薦がなされた。理事会では、審議検討の結果、推薦通り、承認を行った。

受賞者

本川達雄 東京工業大学大学院生命理工学研究科・教授

#### 7. 第7号議案 日本学術振興会育志賞の推薦について (竹井学会賞等選考委員長)

本年より、新たに学会より推薦を行うこととなった、育志賞については、資料9を参照しながら、学会賞等選考委員会から1名の推薦がある旨説明があり、推薦通り、日本動物学会より、日本学術振興会への推薦を行うことを決定した。

動物学会推薦者

豊田 賢治

8. 第 8 号議案 平成 26 年度日本動物学会奨励賞について (竹井学会賞等選考委員長)  
学会賞等選考委員会は、理事会に先立ち、5 月 25 日(日)午後 1 時半より、公益社団法人日本動物学会事務局で選考委員会を開催した旨説明があり、今年度の奨励賞への応募数は、6 名であり、議論の結果、以下の 1 名の候補者を推薦としたいと報告された。理事会は、審議の結果、委員会の推薦通りとする決議を行った。

谷口俊介 (筑波大学付属下田臨海実験センター・准教授 38 歳)

「ウニ胚の神経形成および体軸形成メカニズムの解析」

9. 第 9 号議案 平成 26 年度日本動物学会動物学会賞について (竹井学会賞等選考委員長)  
学会賞等選考委員会は、理事会に先立ち、5 月 25 日(日)午後 1 時半より、公益社団法人日本動物学会事務局で選考委員会を開催した旨説明があり、今年度の学会賞への応募数は、5 名であり、議論の結果、以下の 1 名の候補者を推薦としたいと報告された。理事会は、審議の結果、委員会の推薦通りとする決議を行った。

澤田 均 (名古屋大学 大学院理学研究科附属臨海実験所・教授)

「ホヤの受精機構に関する研究」

第 10 号議案 平成 26 年度感謝状の贈呈について

稲葉理事、中国四国支部長 尾崎理事より、それぞれ 1 名の方の推薦があり、資料 10 にある推薦書を確認した。その上で、理事会は、2 名の方に、感謝状の贈呈を決定した。

井本善次氏 高知大学総合研究センター海洋生物研究教育施設・技術職員

佐藤壽彦氏 筑波大学下田臨海実験センター・技術職員

第 11 号議案 委員会からの審議事項

国際交流担当理事より、資料 11 を参照しながら、仙台大会後の 9 月 14-16 日、東北大学浅虫海洋生物学教育研究センターにおいて、Dr. Christian Sardet (ビルフランシェ臨海実験所) をお招きし、国際交流セミナー開催を企画した。若手研究者が交流する場としてぜひ開催をしたいのだが、招聘のための旅費負担をお願いしたい旨、提案がなされた。

審議の結果、江上基金からの支出により、支出を行い、支出項目名は「若手国際交流促進費」とすることが決議された。

以下 2 件は、議案としてではなく、理事会審議事項として提出されたものであるため、議事録に記すこととする。

窪川男女共同参画担当理事

男女共同参画委員会の活動として、年次大会における求人求職支援活動を本委員会で実施してきたが、さらなる推進を図るため、これに特化した小委員会を本会の将来計画員会との合同で設置することを提案し、承認された。なお、本小委員会は生物科学学会連合に設置されているポストク問題検討委員会（動物学会からは近藤真理子会員が出席）への協力をしていくこととなった。

#### 高宗図書担当理事

資料 12 に基づき、丸善出版より提案があった「動物学の百科事典」出版について検討依頼があった。昨年の岡山大会、および Google hangout を用いた Web 会議で、委員会委員が、丸善出版編集員から百科事典のコンセプトの説明を受け、その後の審議の結果、図書委員会としては、出版を前向きに検討する価値があるという結論に達したとの報告があった。また、編集委員長は、学会会長が就任することが多いと、出版社から説明があったことが紹介された。今年 7 月から会長が交代することもあり、今後、編集委員会の構成等について図書委員会で検討して行くことになった。

尚、高宗理事は、今期で退任となるが、Springer からの出版については Series Editor として継続して係って行くことが確認された

#### 第 12 号議案 日本生物光学協会奨励賞の選考について（阿形会長）

寺北会員より提出された資料 13 を基に、今後、光生物学協会奨励賞候補者をどのように推薦するかについて、会長から説明があった。その結果、（昨年と同様に、光生物学協会委員である寺北が募集し、選考委員も寺北が選出する。今後は、このような申し出があった場合は、団体の学会代表（今回の場合では寺北会員）と賞選考担当理事が協議して決め、その結果を理事会に報告することとしました。

#### 第 13 号議案 学生会費について（阿形会長）

阿形会長より、学生会費に支部会費 800 円を付加したい旨、説明があった。現在、一般会員会費は 11000 円であるが、学生会費は 2200 円である。この割合を 11000 円と 3000 円という形に持っていきたいという説明がなされた。審議は継続し、9 月の理事会時に再度の検討を行うこととなった。

#### 第 14 号議案 新刊 OA ジャーナル Zoological Letters 刊行と Zoological Science(ZS)の今後について

オブザーバーとして参加した倉谷編集長より、新刊 OA ジャーナル刊行と ZS の今後について、説明があった。ご自身としてはアイデアがあるが、理事の方々の意見も伺いたい。新刊 OA ジャーナルについては、1 年間 APC が無料であるので、投稿をお願いしたいことなど意見が述べられた。

(蟻川理事) 2 つのジャーナルは、連動しており、例えば ZS に投稿された論文が ZL での出



版を勧められたりするのだろうか。

(佐藤監事)2つのジャーナルを出版するのは、困難を伴うものであると考える。どのようにされていくのかなど、すでによく検討された結果であると思うが、さらに検討の必要があるのではないか。

新刊OAジャーナル刊行については、今後も理事会での重要議題とし、継続的に議論を重ねていく必要がある旨、会長より、発言があった。

#### 15号議案 .2016年国際動物学会議開催について(阿形会長)

日本学術会議から支援を受けることになったが、天皇家をなんらかの形でご招待してはどうかという意見が、毛利元会長から、出された旨、説明があった。岡副会長から、現在、関わる学会が開催する国際会議で学術会議より支援を受けているが、適当な時期になると、学術会議より、では、天皇家の方々のご臨席はいかがいたしうかと知らせが来るので、それまで待っても良いのではないかとのご発言があり、お知らせを待つこととなった。併せて、会場となる OIST での受け入れについては、国際会議大会長佐藤監事に確認頂くこととなった。

#### 第16号議案 今後の理事会運営について

窪川理事より、若手の学会運営への参画推進のためには、支部の理事数増加が効果的ではないか、またそれにより、会長の直接指名枠の導入などを考えても良いのではないかと意見が出され、理事会の運営に関しての検討を行った。仙台大会理事会で、さらにこの議題について、討議・検討をしていくことになった。

#### 17 その他

富岡広報担当理事より、2014年4月4日に理事メーリングリストを使って送信された動物学会パンフレットについて、意見をいただきたい旨説明があり、印刷したパンフレットが回覧された。動物種にメダカとホヤを加えるのはどうかということが出され、修正を行うこととなった。また、寄付口座に関しても加えるべきである意見がでて、事務局から情報を送り、その点も修正することとなった。

蟻川賞等担当理事より、現在の賞等の選考委員会について審議を行いたい旨、発言があった。学会賞等、OM賞、その他の賞の3つの委員会に分けるのはいかがかという意見がだされた。

平成26年 月 日

議長

議事録署名人

議事録署名人